福祉の見方・考え方を働かせた実践的・体験的な指導方法
～パフォーマンス課題に対する評価基準及び評価方法の明確化～

１　はじめに

平成 30 年告示の学習指導要領が今年度より実施されている。目標や内容が「知識及び技能（技術)」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力の三つの柱で整理された。

令和３年７月の「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料においても，どのような力が身に付いたかという学習の成果を的確に捉え，主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図ることが期待されている。

これらのことから，本研究では，パフォーマンス課題への取組を通して認知症の症状について理解し，その対応方法を考察することを目指す。そして認知症の症状が日常生活に及ぼす影響を考えられるように指導するものとする。また，その成果から福祉の視点を改めて明確にし，授業展開や評価基準及び評価方法の改善を図るものとする。

２　単元の概要

(1) 科目名　　こころとからだの理解
(2) 対象生徒　福祉科１年生　19 名
(3) 使用教材　こころとからだのしくみ（中央法規出版)，学習プリント，タブレット端末
　　ロイロノート・スクール（株式会社 LoiLo,以下「ロイロノート」と表記)
(4) 単元名　　第２章　認知症の症状・診断・治療・予防
　　第１節　中核症状の理解　第２節　生活障害の理解　第３節　ＢＰＳＤの理解

３　単元の目標

(1) 認知症の症状が生活に及ぼす影響について理解するとともに，関連する技術を身に付けるようにする。【知識及び技術】
(2) 認知症の人が社会生活を営む上での課題を発見し，職業人に求められる倫理観を踏まえ科学的根拠に基づいて創造的に解決する力を養う。【思考力，判断力，表現力等】
(3) 認知症を取り巻く状況について自ら学び，個別ケアの実現に向けて主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。【学びに向かう力，人間性等】

４　単元の評価規準

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
中核症状や生活障害，ＢＰＳＤについて理解する。	認知症の人が生活する上で抱えている課題を発見し，職業人に求められる倫理観を踏まえ科学的根拠に基づいて創造的に解決している。	認知症を取り巻く状況について，自ら学び，主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

5　指導と評価の計画（10 時間）

第１節　中核症状の理解	２時間
１　中核症状とは	（１時間）
２　記憶障害	
３　見当識障害	
４　遂行機能障害	
５　空間認知障害	
６　視覚認知障害（視覚失認）	（１時間）
７　社会脳（社会的認知機能）	
８　失語・失行・失認のような症状	
９　病識低下	
10　認知障害以外の症状（神経症状）	
第２節　生活障害の理解	**３時間**
１　生活障害	（１時間）
２　ＩＡＤＬ障害	
３　ＡＤＬ障害	（１時間）
４　家庭内での家族との関係	（１時間）
５　社会参加	
第３節　ＢＰＳＤの理解	**５時間**
１　ＢＰＳＤの定義	（１時間）
２　ＢＰＳＤの要因（背景因子）	
３　ＢＰＳＤの誘因	
４　主要なＢＰＳＤ	（４時間）
５　ＢＰＳＤの評価尺度	

※○印は評定のために用いるもの

時間	学習活動	評価		評価方法
		観点	記録	
第１節　中核症状の理解 【ねらい】中核症状について理解する。				
	・中核症状とは認知障害の視点で捉えた症状であることを理解する。	知	○	・中核症状について正しく捉えている。 定期考査
	・中核症状の内容をまとめる。	知 思	○	・中核症状について分かりやすくまとめている。 ワークシート　定期考査
	・病識低下や神経症状について理解する。	知	○	・病識の低下を測る方法や神経症状について理解している。 定期考査

第２節　生活障害の理解 【ねらい】認知症がＩＡＤＬやＡＤＬに及ぼす影響を考察する。				
	・ＩＡＤＬとＡＤＬの違いを理解する。	知	○	・ＩＡＤＬとＡＤＬの違いを知り，初期対応の仕組みを理解している。 ワークシート　定期考査
	・認知症がＡＤＬに及ぼす影響を考える。	思	○	・ＡＤＬ６項目において，認知症が及ぼす影響を正しく整理している。 ワークシート　定期考査
	・社会参加をサポートする取組について知る。	知	○	・認知症カフェや若年性認知症支援コーディネーターについて理解している。　定期考査
第３節　ＢＰＳＤの理解 【ねらい】ＢＰＳＤの定義や要因を理解した上で，具体的な行動・心理症状を考察する。				
	・ＢＰＳＤの定義について理解する。	知	○	・ＢＰＳＤの定義や分類について理解している。 ワークシート　定期考査
	・ＢＰＳＤの要因・誘因について理解し，介護福祉職として介入可能な要因について考える。	思	○	・介護福祉職として介入可能な背景因子について考え，対応策を考える。　ワークシート　定期考査
	・主要なＢＰＳＤを理解し，対応方法を考える。**（※１）**	知 思 態	○	・ＢＰＳＤの特徴を踏まえ，対応方法を考える。 ロイロノート・スクール ワークシート　定期考査

※１　パフォーマンス課題

6　パフォーマンス課題の概要

認知症の症状に応じた対応方法をグループで検討し，発表する。

事前準備	**３事例を提示する（各グループ３～４名で６グループ）**　別紙 事例Ａ　徘徊傾向のある利用者への対応（アルツハイマー型認知症を想定） 事例Ｂ　幻視傾向のある利用者への対応（レビー小体型認知症を想定） 事例Ｃ　暴言・暴力のある利用者への対応（前頭側頭型認知症など認知症全般を想定）
１時間目	**【個人】調べ学習** ・事例について①現れている症状，②対応方法について調べる。 ※タブレット端末や教科書を用いて調べ学習を進める。
２時間目	**【グループ】事例検討** ・各自調べた内容をグループ内で発表する。 ・グループとして内容をまとめ，対応方法を検討する。
３時間目	**事例検討及び発表資料の作成** ・検討した内容をロイロノートでまとめる。

４時間目	**発表（35 分：１グループ５分＋予備　）** **振り返り（15 分）** ・必ず全員が発表する。 ・他事例について考える。 ・同事例を検討した他グループと自分達のグループを比較する。

７　パフォーマンス課題に対する評価

思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
事例に対する対応方法を根拠に基づいて考察している。 発表資料 Ａ　自分の考えと他者の考えを踏まえて，根拠に基づいた対応方法が考えられている。 Ｂ　根拠が曖昧ではあるが，事例に関する対応方法を考えられている。 Ｃ　他者の意見をそのまま受け入れて，自分なりに考えられていない。 発表態度 Ａ　聞き手に分かりやすいように発表している（声の大きさ，速度，発表姿勢など全体的に良好である）。 Ｂ　原稿をそのまま読んでいるが，発表姿勢はおおむね良好（一部，不十分な点がある）。 Ｃ　準備不足で，発表姿勢に指導が必要である。	ＢＰＳＤについて多角的に捉えている。 ワークシート Ａ　ＢＰＳＤの内容だけでなく，日常生活に及ぼす影響などについて，教科書以外の参考資料などを活用して調べている。 Ｂ　ＢＰＳＤの内容と日常生活に及ぼす影響を教科書から調べて整理している。 Ｃ　ＢＰＳＤの内容について教科書から調べている。

８　取組の様子

本研究の対象クラスは，比較的真面目で大人しい集団であり，自分の考えを述べることを苦手に感じている生徒も多い。これまでの授業において「あなたはどう思うか？」という問に対して，教科書から答えを探そうとしたりする。

これらの様子から，自らの考えを記録（プリント記入）することを徹底させ，グループでの多数決や一人の意見に流されることのないようにしたい。考える視点や活動の見通しを明示し，課題解決に向けた取組を目指す。

(1) 個別の調べ学習

事例検討に入る前に，認知症の中核症状とＢＰＳＤを復習した。その後各自が事例を読み，ワークシートに沿いながら，自分の考えをまとめるように指導した。

タブレット端末を準備しておいたが，多くの生徒は教科書を参考に調べ学習を行っていた。また，出現している症状のみに着目している生徒が多く，その理由などまで考えられていない様子であった。そのため授業の途中で考える視点やポイントなどを説明した。机間指導でなぜこのように考えたのか問うと「教科書に書いている」など，明確な理由や根拠を述べられない生徒もいた。その一方で，提示した事例に対して「この症状が現れる頻度はどれくらいですか？」や「この人は元々どんな人です

か？」など，検討するために必要と思われる情報を挙げる生徒もおり，個別の調べ学習は個人差が大きく表れた。

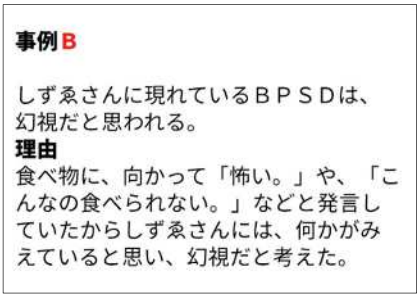
(2) グループによる事例検討

個別の調べ学習で考えた内容をもち寄り，事例検討を行った。メンバーの考えやグループの考えを記入する欄を作っているが，上手く活用できていない生徒が多かった。その都度「事例をしっかり読むこと」や「その人の背景に着目すること」を説明するが，なかなか上手く進まなかった。

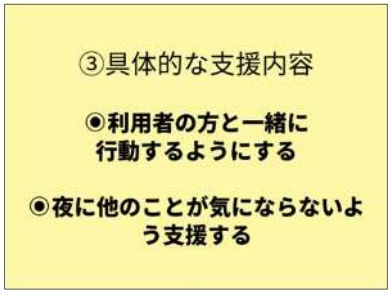
発表資料を作成することに意識が向いている生徒が多く，プリントの活用は不十分であった。

(3) 発表

多くのグループで準備不足が見受けられ，慣れていない様子であった。その一方で，発表原稿を適切にまとめ，準備をしっかり行ったグループもあり，初めての取組としては成果を得られた。



（発表資料１）



（発表資料２）

９　反省

パフォーマンス課題の提示方法や取組時間等，反省点が多くあった。対象クラスが第１学年ということもあり，授業の流れやタブレット端末の効果的な活用方法など不慣れな点が多く，うまく進めることができなかった。集団の特性から①考えること②伝えること③まとめることの全てにおいて未熟さを感じていたため，事前の準備を徹底したつもりであるが，見立てが甘かったように思う。特に考える点において具体的に説明をするが，与えられた事例に置き換えると，頓挫してしまう。

その原因は，大きく２点あると考える。一つ目はこのような取組に慣れていない，二つ目は認知症高齢者と関わったことがない，ということである。一つ目は，入学後からこれまでの間で初めての試みであり，生徒達も戸惑っていたようである。また使用するプリントを作成する段階においてできるだけ取り組みやすいようにしたが，生徒たちはあまり活用していない様子であった。また，ロイロノートの機能を用いて発表資料を作成することが初めてであったため，話し合いよりも資料作成に時間を使っていたように見受けられた。二つ目は，当初の予定であると全員がデイサービス実習を終了した後に，本授業を行う予定であった。しかし，新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から実習の延期・中止が相次ぎ，半数の生徒は高齢者像を抱くことができていなかった。このことから，認知症への理解が深められないまま事例検討へと入ってしまったことが原因と考えられる。

本研究を通してパフォーマンス課題の難しさを痛感した。１年を通して，スモールステップを踏みながら，最終段階としてパフォーマンス課題を提示することが望ましいと感じた。また，課題をまとめる時間も必要であることから，十分な時間の確保が大切である。評価は，発表態度については評価しやすい。しかしグループで資料を作成していると，発表資料の評価が行いにくいと感じた。誰が何を作成したか分かるようにロイロノートを活用したが，最終的には手直しをしているグループがほとんどであった。そのため，グループ活動ではなく個人活動でパフォーマンス課題を行う方がよいと感じた。